

## 第2章・場面3 衝突

---

〈オーロラ計画〉の発表からひと月。各国の科学者やエンジニアが、NASAに派遣されたりエゾンを介して情報を共有し、詳細仕様や設計を懸命に検討している。プロジェクトはとくに動いていた。

国連の計画発表はさながら祝祭のようだったが、その熱気はすでに消え、会議室と研究所には別の熱——焦りと苛立ちが充満していた。

原因は一枚の報告書だった。

「光速の10%で航路に入れば、重力場の作用によって半年でジッテに到達できる。しかし、四年後には.....その航路は崩れてしまう」

飯塚さくらの翻訳チームが、衝撃的な情報をもたらしてきたのだ。

以来、サブプロジェクトは、日数、予算、人員、設備などのバジェット取り合いが日常茶飯事になった。私のところにひっきりなしにチーム間の衝突連絡が来る。

---

欧州の核融合推進エンジン班と日本の航法班は、会議のたびに激しくぶつかった。

「エンジンの最高出力を決められなければ、我々は設計を進められない」

欧州の主任がテーブルを叩くが、日本の主任も譲らない。

「航路は直線ではない。放射線や塵を避けるルートが提示されていると思われるが、その表現が複雑なのだ。高速で安全領域を通る航路を設定するのは容易ではない。しかし、できるだけ速度上限や旋回半径下限は早めにだす。何とか、それ以外の設計を進めてくれないか？」

モアブ科学の理解と翻訳の難しさが両者を追い詰めていた。モアブの数式の解釈が定まらず、航路の計算が二転三転する。エンジンの出力上限、シールドへの電力配分、姿勢制御装置の要求精度——すべてが宙ぶらりんのまま議論だけが空回りしている。

私は両者の声を聞きながら、こめかみに手を当てた。モアブの科学はわれわれより遙かに進んでいる。読み解く困難さはわかっていたつもりだ。だが、こんなにも理解の土台が揺らいでいるとは。

---

ロシアからもエスカレーションがあがる。

「ひとつ、重大な問題がある。我々が月面から回収し精製するヘリウム3の純度は、現状でせいぜい99.2パーセントだ。だが欧州のエンジン班は、99.9パーセントを前提に燃

焼制御を設計している。これでは望みの出力は出ないし、不純物によって中性子線が増え、炉心を劣化させる危険がある」

確かに、ヘリウムのような軽い気体の高純度化は、地上の研究室規模でしか実証されていない。高純度かつ大量生産の突然の要求はまったく想定外だったのだ。

「さらに格納方法だ。ヘリウム3の低温液化のための冷却設備と断熱材で、燃料格納部のサイズや重量が予想よりかさみそうだ。欧州のエンジン班だけでなく、カナダの組立班、中国の居住区班も文句を言うだろうな」

どことなく冷ややで他人事のような言い方だ。思わずNASAメンバーに視線を向けたが、彼はすぐにうつむいてしまった。この問題も、やがて火を噴くことになるだろう。

---

問題はまだまだある。中国の居住区設計チームと医療班も衝突を繰り返していた。

「長期間滞在には最低でも0.8Gが不可欠だ。下回れば骨密度と筋力が著しく低下し、身体は深刻な状況に陥る」

医療班の主任が強く主張するが、居住区設計リーダーが応じる。

「0.8G！居住区外周部の直径は四百メートルになるぞ。重量も化け物だ。製造がとても間に合わないし、できたとしても航行速度や燃料への影響で現実的ではない」

人工重力の仕様は、居住区のサイズと船体重量を決める。船体重量は速度と燃料搭載量に直結し、さらに製造日程を左右する。すべてがトレードオフで繋がっていた。議論はいつまでも平行線を辿り、誰も譲らなかった。

---

カナダの組立班からも悲鳴が上がる。「エンジンも居住区もサイズが確定しなければ、ロボットアームの設計が進まない！精密駆動部品はリードタイムが長い。いくらわれわれでも吸収できないぞ」

各国の代表が声を荒げ、会議室の空気は重苦しい。ホログラムに投影された船体図は、ワーニングマークが日ごとにできては消え、形を変えていった。

私は深く息を吐き、椅子に背を預けた。——これが国際協力の現実なのだ。首脳の華やかな握手や宣言ではなく、設計思想のぶつかりあい、闘いだ。多くの糸が絡み合っている。どうすれば解きほどせるのか——

「グラハム？」

ソニアが私に何か声をかけていたようだが、気づかなかった。

プロジェクト開始から一か月。私たちはまだ、船の骨格すら定められずにいた。時間は残り四年——その針は無慈悲に刻み続けている。